職制との対決だ！

一斉着到で組合員の声

十一月二日、あらゆる弾圧、分裂をけって二八二日を闘いぬいた組合員は二八三日ぶりに入門し、就労のための着到を実施した。たとえ闘いの成果は満足すべきものではないにしろ、どの顔も誇りと自信に満ちて明るく、胸をはって堂どうと会社の門をくぐった。新しい闘いはこの日からまた開始されたのだ。生涯忘れ去ることはないであろうこのいっせい着到の日、組合員・主婦の感想をのべてもらった。

連帯を深めよう

三川　永江（主婦）

二十八年の闘争のときは首切り撤回ができ明るい就労だった。三川の場合は拒否者を先頭に入門したそれがこんどの場合は拒否者を入れることができなかった。首切り撤回ができなかったということは何といっても悲しく憎しみでたまりませんでした。

拒否者の方が三川鉱の門札をひっくりかえして「首切り会社」とスミ黒ぐろと書かれたのをみて、拒否者の気持ちとしてはもっともだと思いました。

この拒否者の気持ちを、私たちはこんどの運動のなかに生かして、無にしてはならないと決意しました。こんどの闘いは必ず勝つという決意をもっていたのがこういう結論になりました。だが、これであきらめてはいけない、何時かはこの不当解雇を撤回しなければならない。

全国に拒否者の人たちが散って行き、大きな労働運動の基盤になり私たちは法廷闘争を守り、また就労する人たちは拒否者のいままでの闘いを無にしないよう頑張ってもらわなければならない。

私たちは今、くよくよ泣いてばかりはいられないのです。闘いはここからだとしみじみ思いました。もっともっとみんなが目覚め、一人ひとりが強くなって力を横にひろげていかなければならないときです。

この闘争を通じて労働運動の基盤ができたと私は思います。私たちが得た体験を他の単産に入れて行き、この人たちと手を握って連帯を深めて行くことが必要だと思います。

主婦会・オルグの拍手に包まれて入門する（三川で）

目前には選挙闘争が横たわっています。横の連帯をひろめこの選挙に絶対勝つべきだと、悲しみを通りこして逆に怒りがわいてきます

このエネルギー

港務　川口（拒否者）

いっせい着到を見て思ったことは第一に、一人ひとりにほんとうに職場の活動家として、労働者の権利を守ってゆくという気持ちが出ていたことである。

一・二〇〇名の職場活動家が職場から離れていったとはいえ、この姿を見てほんとうに安心した。「闘いは負けていない、これから職場闘争をやっていこう」という気はくが組合員の面上にあきらかに出ていた。たとえ労働条件は実際的には下ったとはいうものの、これから労働者の権利を一つひとつ築きあげていこうというエネルギーが、闘いのなかでハツキリとできあがったようである。

残ってよかった

港務　一主婦

どう自分の気持ちを説明したらよいかわかりませんが、やっぱり第一組合の方に残っていてよかったなアとそう思いました。

どんなところに行っても心のままに口をひらかれ行動されるし、労働者のたくましさをつくづく感じました。

着到を激励に行きましたが、入口にいた守衛は顔をまともに出せずに引きこめていました。とにかく残っていてよかったとしみじみ思いました。

憲法の破壊者だ

最高裁横田新長官

田中耕太郎氏の跡目をつぐ最高裁三代目長官に東大名誉教授横田喜三郎氏が任命された。他の七裁判官とともに十一月二十日国民審査に付されるわけだが、横田新長官は信任できる人だろうか？。

池田政府が新長官選考にあたってとくに意を用いたのは「第一に〃思想傾向〃」つまり「共産主義に対するはっきりした態度」（毎日10・18夕刊）であった。少しでも政府に批判的な言動を行なった人は資格がないとされた。立大教授宮沢俊義氏、京大名誉教授我妻栄氏らがはずされたのもこの理由からであった。〃憲法の番人〃として憲法に最も忠実であるべき最高裁長官を政府や自民党は党利党略によって選んだのだ。

〃池田政府が選んだ人〃横田新長官は早速期待にこたえて「共産主義を排する。それで反動といわれても仕方がない」といい切った。これでは特定の思想を頭から犯罪視して〃思想裁判〃を行なおうとしているとしか思えない。言論、思想、結社の自由を保障した憲法にさらすことになる」（「安全保障体制の研究」）と公言し、五・一九の民主主義破壊にも批判的なことは一言もいっていない。

ガンコな反共思想の「必然の帰結」ではあろうが、ここでもまた憲法はツバをはきかけられている。

横田氏はこのように、悪名高い田中長官の跡目相続人としては最適任者だが、平和・民主主義憲法の番人として最不適任者だ。

国民審査では他の七人の裁判官とともに、ハツキリと×印をつけよう。

憲法を守れ

労働者として正しいことをしてきた、そのあとの気持ち。私たちは全力をつくして闘ってきました。結果はこのようになりましたが、労働者としての誇りを感じています。また、資本の攻撃というものが、いかにきびしいものかということもつくづく知らされました。

怯けずまず闘いだ

港務　雑貨分会員

まったく不満の一言である。私の職場（雑貨）の場合は半数以上が配転になり、二十何年間働きなれた職場を追われ、安定所の人夫が入ることになっている。第二組合員に対する憎しみの感情はまだまだとけない。

着到に行ったときも、初めての着到だから組合員がシュンとしてくるだろうと会社の方は思っていたらしかったが、堂どうとしてハツキリと団結をしめしてみせたのでビックリしていた。職員もあがってしまってマゴマゴしていた。いっせい就労になったとはいえ、われわれの胸の中からぬけないのは一・二〇〇名のことである。

一日もはやくわれわれが失った諸条件をとりもどすことが、あとにのこされたわれわれの使命でもあるし、一・二〇〇名にたいする唯一のはなむけでもあると思うし、またわれわれにあたたかい支援をおくってくれた全国の仲間たちに対するご恩がえしになると考えている。ここでおじけることなく、これからが闘いの第一歩だとの感じを強くうけた。

仕事は負けぬぞ

三川　相川

私の職場乙方開発では、拒否者の人たちが部内の基金は自分たちはいらないといって受けとらなかった。拒否者の人たちは会社の中に入れない。それで、分会旗をその金でつくり拒否者の名前を染めぬき、私たちがそれをもって拒否者もいっしょに分会全員で入門する気持ちで入った。

着到場には職員のうしろに第二組合も多数きていた。その顔をみたとたん「こんどみていろ」という気持ちとともに、組織を破った人間としてわれわれの顔をみて恥ずかしくないのだろうかと思った。会社は職場活動家をとりのぞいたと思っているのだろうが、着到にきた組合員の顔をみると、どの顔も活動者の気はくをひめ、いままでより以上の活動家が生まれている。

はじめて入門して感じたことは、職制にひきずられて作業した第二組合員どもが、どんなふうに作業をしてきたのだろうかと見たくてたまらなかった。われわれは仕事の面でも決して第二組合員どもに負けない誇りと自信がある。就労とともにこのことはたのしみだ。それとともに自分たちの行動もハツキリと会社にしめしてやらなければならない。

一・二〇〇名の人たちが入れなかったのは身を切られるように残念でたまらなかった。「あとはたのむぞ」と励げまされ着到に行ったが、私たちは決してあなたたちに負けない、いやそれ以上にこんどやるから心配しないでくれという気持を胸に着到した。

どの顔も活動者

宮浦　前田

着到に来たどの顔をみても、いぜんと違ってみんなが活動者の顔になっている。さすが、一年間の闘争でみんな鍛えられたなアとつくづく感じた。

闘いに負けてしゅんとしているのではなく、かえってはげしい気はくに満ち満ちている。

会社は思い知るだろう。活動者を解雇したのはけっしてプラスにならなかったということを。活動者は以前以上に増えてきた。

とにかく着到に来て感じたことは暗さがぜんぜんなく、いまから職場に入って第二組合員、職制と対決するのだというつよい気はくを身にしむように感じたことである。

更に連帯を強め

九州のうたごえ終る

第八回九州のうたごえは十月二十九、三十日の両日、小倉市で約六千名の働く仲間が結集してひらかれた。三池からは各支部の合唱サークルを中心に主婦十名をまじえ八十名が参加したが、小倉炭鉱の社宅に分宿し連帯をふかめて帰山した。

まず、前夜祭が市民会館で午後六時に開幕、ここで各サークルごとの創作と合唱発表が行なわれた。三池から参加した仲間たちも、各支部ごとに分かれて発表、とくに港務支部前原さん（主婦）の作詩した「はちまき固く」「闘いの火は消えず」は会場の大拍手で迎えられた。

各サークルの発表後、合唱団の審査で六団体が表彰されたが大牟田合唱センターが特等になり、他の優秀五団体の中に宮浦合唱団、三川青年行動隊合唱団が入るというすばらしい成績をおさめた。

明けて本祭典は午前十時から市体育館でひらかれた。この日、小雨の中を会場めざしてぞくぞくと全九州の働く仲間たちが元気よく参加した。

働く者のたくましいうたごえが、強く強く会場を圧してひびきわたった。三池は各支部ごとに合唱、とくに三池主婦会を代表して参加した十名の主婦たちが演じた「オラトリオ三池の火は消えず」は参加者に大きな感動をあたえ、涙を流して聞かれ、闘いはこれからという意義を与え、はげしい声援をうけた。

一年余にわたるはげしい資本の攻撃をガッチリとうけとめ、闘い抜いてきた三池の組合員のうたごえは、参加者から多くの注目をあつめていたが、「三池はものすごく動作がキビキビしていてキレイだ」と各支部のサークルとも、賛嘆されていた。

東京からこの大会のためにはるばるかけつけてきた声楽家の関忠亮氏も会場で独唱されたが、「三池の主婦の子守うた」もうたわれ、合唱とはまた違う独自な味が出され、涙が出そうな感銘をうけた。

また、大会の名で松川、三池、豊州のカンパが提案され満場一致で決定、場内カンパも行なわれた。

とにかく闘いとともに育ったうたごえの活動は、三池闘争の中でも大きな働きを見せてきたが、すべての闘いの先頭に立って闘っているという感じが、大会の中でははっきりかもし出されていた。

豊州炭鉱の組合員は長靴姿で会場から挨拶し「こんど闘いを強めて行くので御支援を願う」と訴えていた。

なお、うたごえは二日間にわたったため宿泊所は小倉炭鉱労組の仲間たちが骨折ってくれた。

小倉炭鉱の社宅に分宿した人たちは、夜遅くまで組合員、主婦と交流をふかめ、ますます連帯をひろめていった。

三池闘争のストライキ解除に当っての宣言

三池労働者と家族のみなさん!!
全国の労働者と国民のみなさん!!
「三池を守れ!!　三池の火を全国に!!」この言葉こそ一九六〇年を通じ闘う全労働者と働らく国民の相言葉となりました。日本の戦後十五年にわたる労働争議のなかで三池のたたかいほど全労働者、国民の共感をよび、それに支えられて前進したものはありませんでした。しかもそれは、国内にとどまらず国際的な連帯にまで発展しました。三池闘争のもつ重大な意義が、ここに理屈ぬきに表明されているといえます。

三池のたたかいを貫ぬくものは労働者階級としての限りない抵抗の精神でした。この精神こそが、三池闘争をして空前の大闘争として発展させた根本であり、同時にこれこそが平和と独立、民主主義を守る新安保体制反対のたたかいと離れがたく結びついたのでした「安保と三池」は一九六〇年における労働者階級の抵抗の象徴であり、わたしたちの前進を示す指標でもありました。

にもかかわらず、この闘争を労働者階級の勝利をもって終らすことはできませんでしたわたしたちはこのことを、この歴史的瞬間にあたって卒直に反省しなければならないと思います。すなわち、抵抗の精神がいまだ労働者階級全体にしっかりとつかみとられていなかったこと、限りなく違ましい力をもちながら、その力を効果的なたたかいとして組織し得なかったことなど、いろいろな組織的欠陥と弱点を明らかにしなければならないと思います。

だが、わたしたちは決して悲観もしませんし、これからの幾多困難なたたかいを前にしても、決してひるむことはないでしょう。なぜなら、三池闘争と安保闘争の中で日本の労働者階級は自らの闘う無限のエネルギーを明らかに示しましたし、限りない連帯の前進を事実をもって証明してきたからです。

わたしたちは思いだします。あの焼けつくような真夏の炎天のもと、三池の労働者と家族、それをつつんで起ったわたしたち労働者二万のホッパーピケ、四十万に及ぶ全国の動員と約十億の資金カンパ、働らくものの生活と権利を守るため、労働者階級の解放をかちとるためのたたかいに、わたしたちは、私たちのもてる全てのものをなげだして闘ってきました。またこのたたかいは、すべての国家権力、一切の弾圧機関からわたしたちを守る手段は、わたしたち自身の団結の力以外にないことを教えてくれました。

三池の労働者と家族のみなさん!!
全国の労働者と国民のみなさん!!

三池のこれからのたたかい――それは、おそらく難苦につくせぬ困難なものがあることでしょう。

しかし、この大闘争をたたかいぬいた三池の労働者と家族は、かならずやこの困難を克服し組織の前進と統一を闘いとることを信じて疑いません。同時に今日まで共に闘ってきた同じ仲間である炭鉱労働者と総評に結集する労働者階級「三池を守る会」を中心とする全国民の共闘は、かならずやこの闘いのため苦楽を共にし、闘いつづけることを誓うものであります。

わたしたちはいま、二八二日におよぶ長期かつ苦難なたたかいに一応の終止符をうつにあたり、この闘争のもたらした大きなみのりを労働者階級全体の前進の糧とし三池の労働者をがっちり守りつつさらに烈しさをますます炭鉱独占の十一万人体制の攻撃を、そしてさらに支配階級全体の合理化攻撃をがっちりうけとめ、ひるむことなくたたかいつづけるであろうことを宣言します。

一九六〇年十一月一日

日本労仂組合総評議会
日本炭鉱労仂組合